
現代の通過儀礼～男児割礼

kodomozurumuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代の通過儀礼〜男児割礼

【Nコード】

N1842N

【作者名】

kodomozurumuke

【あらすじ】

日本は恵まれた環境の中でモラトリアムの拡大が問題視されるようになっていった。成人式はただのお祝いとなり、子どもから大人への通過儀礼が消滅していた。そのことは青年期を必要以上に引き伸ばすこととなり、義務教育を終えても一人前となりきれない人材を生み出していた。

これらの打開政策として「男児は義務教育を終える直前に全員が通

過儀礼として割礼を受ける」というものが提案された。体に、特に男児のシンボルであるペニスに一瞬の痛みを与え、それに耐えることが大人への認識という考え方であった。心と体の痛みに耐えてこそ、厳しい社会を生き抜くことが出来るとうたわれていた。更にその背景には隣国、韓国へのライバル視があつた。韓国では大半の男の子が小学生の時に包茎手術を受け、ズルムケになる。一方の日本は「包茎は病気ではない」という教育が浸透した結果、包茎を改善しようとする考えすら衰退してしまい、成人しても皮かぶりが常識となつてしまった。まずは男性のシンボルで韓国に負けないように、これが××首相の考えだつた。突然古い慣習を取り入れることに抵抗を示すものも多かつたが、首相の人気とパワーに押し切られた形で多くの国民は同意した。

全国での必修化を前に、まずは実験的に何校かで導入することとした。この小説は実験校として選ばれた学校の生徒たちを描いたものである。

プロローグ

日本は恵まれた環境の中でモラトリアムの拡大が問題視されるようになった。七五三も成人式もただのお祝いとなり、子どもから大人への境目は感じられなくなっていた。そのことは青年期を必要以上に引き伸ばすこととなり、義務教育を終えても一人前となりきれないという状況を生み出していた。

これらの打開を訴えた 党の××党首が多くの支持を集め、総理大臣に就任した。そして打ち出した政策が「男児は義務教育を終える直前に全員が通過儀礼として割礼を受ける」というものだった。体に、特に男児のシンボルであるペニスに一瞬の痛みを与え、それに耐えることが大人への認識という考え方であった。割礼は諸外国で今も昔も行われている通過儀礼である。心と体の痛みに耐えてこそ、厳しい社会を生き抜くことが出来るとうたわれていた。更にその背景には隣国、韓国へのライバル視があった。韓国では大半の男の子が小学生の時に包茎手術を受け、ズルムケになる。一方の日本は「包茎は病気ではない」という教育が浸透した結果、包茎を改善しようとする考えすら衰退してしまい、成人しても皮かぶりが常識となってしまう。まずは男性のシンボルで韓国に負けないようにこれが××首相の考えだった。突然古い慣習を取り入れることに抵抗を示すものも多かったが、首相の人気とパワーに押し切られた形で多くの国民は同意した。

首相が就任したのは2000年の秋だった。首相は翌2001年度には法律を整備し、全国で必修化しようと考えた。まずは2000年度末に実験的に何校かで導入することとした。この小説は、実験校として選ばれた学校の生徒たちを描いたものである。

東京都 区立A中学校（前篇）（前書き）

通過儀礼は痛みを与えることが必要である。したがって包皮を切る際に麻酔は不要というのが方針であった。一瞬ではあるが相当な痛みを伴う。儀式の方法も数種類から検討されることとなっていた。

東京都 区立A中学校（前篇）

都内にあるごく普通の公立中学、A校も実験校となった。高校受験が一段落した3月半ば、卒業直前に儀式は行われることが決まった。高校受験への影響を考え、直前まで知らされていなかった。

突然男子だけが体育館に集められ、学年主任から？わが校は名誉ある実験校に選ばれた？来週の金曜日放課後に実施する？来週の土日は休養日にあて、遊びに行かないこと？動揺を避けるため中1・中2の後輩や女子にはこの話をしないこと？当日休んだものは翌月曜日に行くことになるので欠席しないよう体調を整えておくこと等が言い渡された。これを聞いた生徒たちの顔はこわばった。噂には聞いていた通過儀礼ではあるが、今年はまだ大丈夫と安心しきっていた。中学卒業を前にとんでもないことを通告されてしまったのである。1クラスに男子は約20人。そのうちの3人〜5人くらいは既にブルムケになっている。大して戸惑いを見せなかったのは彼らだけだった。わずかな期間であるが、何とか剥き癖をつけようと努力したのも多かった。

かくして金曜日は来た。通告など大して意味はなく、女子生徒や後輩たちも今日何が行われるのか大体知っていた。各クラスでは「今日は大事な校内行事があるから学校内に残らず迅速に帰宅すること」が申し渡され、中3男子以外は全て学校外に出された。中3男子はクラスごとに会場の体育館へと歩いていった。直前にトイレに行き、しっかり包皮を剥きあげて戻らないようにする者も多かった。

体育館には5人の医師が待機していた。生徒たちは医師の前まで行くくと制服のズボンとパンツを膝まで下ろして直立不動になるよう命じられた。体育館には体育教師をはじめ、屈強な教師が勢ぞろいし

て、逃げ出したり暴れたりしないよう監視していた。

A校の中3は5クラスある。約100人の男子が検査を受ける。最初の直立検査は、通過儀礼不要者を除くためのものだった。既にズルムケであることが認められれば通過儀礼は受けなくて良い、という話が最初にされた。ズルムケだったもの、トイレで剥いてきたものは開放されるはずだった。すっぽり皮がかぶっているものは剥かれることもなく、割礼対象と認定された。半剥け状態の者は皮を引きのばされ、切るだけの皮があるかどうかを確認された。ちよつと剥けかけていたくらいのものは大半が対象と認定された。大半が剥けているものは溝まで深く剥きあげられ、戻らないことを確認した上で開放となった。そして何とズルムケの者も、一度皮をかぶせようと引つ張られた。かぶせようとしても皮が戻ることなく、またズルムケの状態になるものは開放された。しかし直前に剥き癖をつけてきた者などは、簡単に皮が再びかぶってしまい、あえなく割礼対象となった。逃げ切れると確信していただけに彼らの落胆は大きく、割礼を命じられると同時に泣き出すものも現れた。

東京都 区立A中学校（後篇）（前書き）

前話、体育館で中3男子が5人の医師の前に並ばされ、割礼対象か否かを直立不動のまま判断されたところまで書きました。第3話は実際の儀式を描いています。A中学校では以下のような方法が実験されました。

東京都 区立A中学校（後篇）

結局、約100人のうち免除されたのは20名弱。残りの80名ほどはその場で包皮を無麻酔で切除という儀式を強制的に受けさせられることになった。直立検査で合格と判断されたものはその場でズボンとパンツをはき、帰宅が許された。不合格だったものは一旦パンツをあげ、ズボンは脱いで畳んで手に持つよう命じられた。全員がの直立不動検査が終わると、いよいよ包皮切除の時間が迫ってきた。体育館には簡易ベッドが10台運び込まれていた。

こういう時、出席番号が早いものからとなる。早く済ませることが幸か不幸か、本人たちには判断することが出来ない。これから迫り来る恐怖で思考回路も鈍っているのだ。引率教員の指示により、どのベッドで切除を受けるかが決められていった。5つのベッドが体育館の一番舞台側におかれ、一応姿を隠すカーテンで仕切られていた。5人の医師が切除を担当するのである。そしてその手前にはこれまたカーテンで仕切られた中にベッドがあった。こえは陰毛を除去するためのベッドである。切除用ベッドと陰毛除去用のベッドが2台縦に並び、その手前には下半身パンツ1枚の男子が並ぶ異様な光景が展開されていた。騒がしくならないよう、各列には体育教師がしっかりと見張っていた。

ここからは若い女性看護師もスタッフに入る。医師の横でメスを手渡したり器具の交換、さらには陰毛除去も彼女たちの仕事とされた。ただでさえ性欲旺盛な年頃の男子である。若い女性がいる前で脱ぐというだけで大騒動なのだ。まして陰毛をそられるとは・・・陰毛をそるとは聞かされていなかったので皆立派に生やした状態だった。教師から「手前のベッドで陰毛を除去し、終わったら裸のまま待機し、準備OKの声が出たらすぐカーテン内に入って割礼してもらう

こと」が命じられた。陰毛除去用ベッドでは看護師がなれた手つきで男子生徒の陰毛をそっていく。下腹部からペニスの付け根まで、万遍なくかみそりで除去する。更にかみそりをあてられない部分はハサミで処理をする。看護師の前でペニスを丸出しにし、更につかまれて男子たちが感じないわけがない。中には大きく勃起させているものも存在した。陰毛をそり終わるとペニス全体をガーゼで消毒する。これまた感じてしまう生徒が多い。

いよいよ最初の5人が除毛を終え、割礼用のベッドに入っていた。麻酔は使われない。切除の方法はきわめて原始的なもの。包皮を器具で出来るだけ引き伸ばし、切除ラインに印をつける。かなりの力で引き伸ばされるのだからそれも痛みを伴う。小さくうめき声が聞こえる。一旦つかんでいた包皮を離すと今度は左手に器具を持ち、強く引つ張った。そして切除ラインの付近にメスを素早く入れる。まるで包丁で引ききるような形だ。大抵の場合、一度では切れず数回押し引きをして包皮の先端が切り離される。その間、男児たちは激痛を味わう。一瞬のこととはいえ、デリケートな部分に激痛が走る。多くの生徒は叫び声をあげる。中には泣き出してしまうものもある。切除は機械的に続けられ、切り落とした後はよく滲みる消毒液と出血止めの薬を塗られ、すぐに退去させられる。こうして次から次へと、80名前後の男子生徒が包皮を切り落とされていった。

相当な痛さが残っているがパンツだけはすぐはくように命じられる。すぐに帰宅してもよいし、教室や保健室でしばらく休憩することも許されていた。校庭の隅では約80名分の切り落とされた包皮が全て集められ、火に焼かれていた。こうして東京都 区立A中学校の中3男子から包茎が消滅した。彼らは確かな痛みを体を受け、大人社会の厳しさを少しだけ実感していた。

島根県××村立B中学校（前書き）

第2話・第3話では東京都の公立中学を舞台にし、メスを使った割礼を描きました。第4話は過疎が進む島根県農村部の公立中学が舞台です。日常の教室で繰り広げられるとても簡易な割礼の様子です。

島根県××村立B中学校

モラトリアムの拡大により若者が墮落しているという指摘を受け、通過儀礼の復活が掲げられた。その内容とは、中学を卒業する前に割礼、すなわち男児の包皮を切除するというものだった。中学卒業の前に包皮が完全に剥けていれば切除されることもないのだが、包皮でいいという教育がまかり通っている今日、中学生でズルムケという生徒は2割にも満たなかった。

来年度からの全国必須化を目標に、まずは全国から数校が選ばれて実験的に導入されることになった。都会の学校だけではなく、地方の学校も実験対象に、ということを選ばれたのが過疎地域にある中学だった。各学年1クラスで生徒は20名強、全校でも50名程度の小規模校だ。過疎地域の中でもこの学校が選ばれたのは、中3男子が12人と比較的多いからだった。

小さな村、保護者に対する説明は大分前に済ませてあった。本人たちに伝えるのは当日でよい、という方針が固まった。塾通いをしている子もいるが、それとて全員が村でただ1つの塾であり、その教師も村民であるから事前に打ち合わせしておけば何の問題もなかった。かくしてその朝を迎えた。男子は放課後に用事があるから授業終わっても残るようにとだけ伝えられた。この時点で自分のペニスに刃物が入ると知るものは誰一人いなかった。

授業が終わり、女子生徒や1・2年生は全員帰宅した。3年生の教室に生活指導教諭と白衣の医師1名が入ってきた。机は全部、教室の後ろに下げてあった。前にはいすが1つあり、その横には机が一つだけおいてあった。医師たちはいすに座ると、かばんからステレンス製の器具を取り出した。何が始まるのか心配そうに見ていた男

子中学生に対し、生活指導教諭はずばんとパンツを脱いで後ろの机に置くよう命じた。男子たちは顔を見合わせ、なかなか脱ごうとしなかった。「早くしろ」という生活指導教諭の一喝により、生徒たちは恐る恐る下半身裸になった。小さい頃から一緒に遊んでいるクラスメイトだ、誰も恥ずかしいとは思わない。しかしだからといって学校の教室で、陰毛も生えそろった性器をあらわにすることは抵抗あった。

ここではじめて今日の目的が告げられた。一人前の男となるために、君たちはこれから割礼という通過儀礼を受けるのだと。一瞬痛みがあるかもしれないが、騒ぐことないようと命じられた。まずは医師が全員のペニスを見渡した。そして皮の余り具合が多い順に並べ替えさせた。

最初の一人が医師の前に直立不動で立たされた。7cm足らずの小さいペニスであるが、2センチは皮だけが余ってたれていた。医師は無言のまま皮をつまんで左手で思い切り引っ張った。生徒の後ろには生活指導教諭が立ち、ベルトをつかんで固定した。かなりの力でつかまれているから、ペニスの先の皮を引っ張られていたくても逃げられない。皮を思い切り引っ張ると、医師は右手に医療用のハサミを持った。そして生徒の包皮をそのハサミで容赦なく切り落とした。恐怖から目を背けていたその生徒は急に襲ってきた激痛に思わず叫び声をあげた。一部始終を見ていたクラスメイトも動揺して騒ぎだったが、生活指導教諭の一喝で静まった。医師は左手に持った包皮の先を机に置くと、なれた手つきで化膿止めを亀頭に塗った。それがしみてまた叫び声をあげそうになる生徒だった。皮の長さには長短はあれど12人中6人までが皮余りのある状態で、同じように次々処置された。

残りの6人中、2人は先端が閉じているものの余りはなかった。医

師は出来るだけ包皮を引つ張つて、亀頭を傷つけないよう留意しながらハサミを入れた。更に2人は途中まで剥けていた。医師は包皮の横にハサミをいれ、切込みを入れていった。それも片方ではなく両方。完全に剥けていたのは2人。医師はまず皮を引つ張つて戻してみた。1人は皮を戻すことが出来たので、同じようにハサミを入れられてしまった。皮を戻すことすら出来なかったただ1人の生徒のみ、根元にたまっていく包皮に切り込みを入れて終わった。

結局、剥けている子も剥けていない子も何らかの形でハサミを入れられた。痛みを与えろということが通過儀礼では何より重視された。それが大人の痛みだと教えられた。ベッドもメスもつかわず、看護師さえいない簡易的な割礼だった。机の上には前半、皮余りが多くて切り落とされた学生の包皮が無造作に置かれていた。そして床には血がにじんでいた。

血がとまったらパンツとズボンをはき、全員で掃除をして机を戻し、帰宅することが命じられた。卒業を間近に控えた12人の生徒たちにとって、夢なら覚めて欲しいと思う悪夢の1日、いや1時間が終了したのだった。

島根県××村立B中学校（後書き）

過疎が進む田舎らしい光景が繰り広げられました。とても神経が敏感な包皮をハサミで容赦なく次々切り落とされていく男の子たちの様子が目に浮かびましたでしょうか。

私立C大学付属小・中・高等学校（前編）（前書き）

基本的に試験的導入は各地の公立中学で行われた。その中、有名大学医学部を持つC学園は付属の小・中・高等学校において自主的な試験導入を申し出た。医学部生の研修にも好都合という判断だった。かくして全男子生徒に対してまずは包茎検査が実施された。

私立C大学付属小・中・高等学校（前編）

C学園は田舎の子どもでも知っているような有名大学である。この医学部は、医者を目指す人なら誰もが憧れるような施設を持っていた。その分、付属小・中・高の学費も高く受験競争も激しいので中級以上の階層でなければとても通うことは出来なかった。医学部を持つC学園は社会の流れを好機だと受け止めて、医学生の実験を兼ねて付属校全男子生徒の包茎検査実施を決めた。時期は3学期初日。名目上は「臨時身体検査」となっていた。男子生徒だけを行ったのでは何かと不都合である。だからといって女子生徒を脱がせて何らかの検査を行うことを決めれば保護者をはじめ各所から問題が生じることは明らかであった。そこで女子生徒は小学校低学年・小学校低学年・中1と中2・中3と高1・高2と高3、という5グループに分け、体育教諭・養護教諭と産婦人科の医師らによる綿密な性教育が行われ、その後で個別の身体検査と問診を行うこととした。

さて、男子生徒はクラスごとに診察を受けることになった。ほとんどの親は包茎検査のことを子どもに伝えていなかった。診察は小学校／中高の体育館をそれぞれ使って行われる。カーテンで仕切られた簡易診察室がずらっと10個並んでいた。その中には医師が1人と見習いの学生1人、新人看護婦1人という構成だった。1クラスずつ、担任の先生に引率された体育館に入る。ほとんどの子が内科検診を想定してカーテンの中に入っていく。しかしそこでは医師の前に立たされ、後ろからズボンとパンツを一気に下ろされる。あつという間に医師がペニスをつかむ。後ろからしっかりと羽交い絞めにされ身動きはできない。そして間髪いれず、包皮を剥かれるのだ。甘やかされて育ってきた子どもたちが多いこの学校では、初めて皮

を剥いたという子も少なくない。小学校低学年ともなればほとんどの子がその場で泣き出してしまふ状態だった。出来るだけ声が聞こえないよう、診察室の前には2人しか並ばせず、他の子どもは体育館の外で列を作って待機させた。

さすがに中高生となると体力的にもだまして無理やりというわけにはいかない。まずは教室でこれから行われる検査を説明する。いずれは麻酔を使わない包皮切除が義務化される見込みであること、痛みなく剥けないと種々弊害があること、隣国では小学生の多くが包皮切除を受けていること・・・大切な検査を無償で受けることが出来る君たちは幸せであるから暴れず素直に受けることを強く命じられる。ざわつく生徒たちを教諭が厳しく制した。中高生は診察室の前に並ばされ、絶対私語禁止となっていた。中流以上の階層であるから、家庭内で性の会話があることはまれである。意図的に性の情報から遠ざけられてきた生徒も多い。だから中高生の中にも、自らの包皮を剥いたことさえない者がいる。突然わが身をおそった検査への恐怖で、思わず泣き叫んでしまふ生徒もいた。

検査項目は以下のとおり。

? 反転の可否 (A 溝まで露出できず B 露出可能だがきつさがある
C 容易に露出可)

? 恥垢の有無 (A 多く見られる B 少々見られる C 見受けられない)

?包皮の長さ) A包皮が長い B包皮がやや長い C包皮は短め)

そして医師の所見による総合診断結果が記される。

A 早めに包皮切除を受けることを強く推奨する

B 今後改善の見込みもあるが、できれば包皮切除が望ましい

C 現状ではどちらともいえないが、包皮切除も推奨される状態。

D 今後、亀頭が完全露出することが見込まれ、経過観察が相当。

E 既に亀頭が完全露出しており、包皮切除の必要はない。

結果が記された紙は診察日にすぐPC入力され、各家庭に送付される。それを受け、各家庭で包皮切除を行うかどうかの判断がされ、学校へ返信する。

私立C大学付属小・中・高等学校（前編）（後書き）

中篇では包茎検査の結果を描いていきます。

私立C大学付属小・中・高等学校（中編）（前書き）

超有名な医学部を持つ私立大学付属の小中高等学校。全男子生徒に
対する包茎検査を実施し、その結果を家庭に送付する。検査項目は
？反転可否？恥垢有無？包皮の長さである。

？A溝まで露出できず B露出可能だがきつさがある C容易に露
出可

？A多く見られる B少々見られる C見受けられない

？A包皮が長い B包皮がやや長い C包皮は短め

更に医師の所見を加えた総合判定が示される。

A早めに包皮切除を受けることを強く推奨する

B今後改善の見込みもあるが、できれば包皮切除が望ましい

C現状ではどちらともいえないが、包皮切除も推奨される状態。

D今後、亀頭が完全露出することが見込まれ、経過観察が相当。

E既に亀頭が完全露出しており、包皮切除の必要はない。

? A 溝まで露出できず B 露出可能だがきつさがある C 容易に露出可

? A 多く見られる B 少々見られる C 見受けられない

? A 包皮が長い B 包皮がやや長い C 包皮は短め

私立C大学付属小・中・高等学校（中編）

検査結果はすぐにPC入力される。そしてほとんどの家庭にメールで送信される。このメールは学校と保護者が連携を取れるように設置されているものであり、保護者の携帯に届く設定も多かった。メールを見るのにはパスワードが必要であるため、ほとんどの家庭では子ども自身が先に見ることは出来ないようになっていた。メールを設置していない家庭にも翌日には送付される。早い家ではその日の夜には結論が出て返信が送られる。返信期限の5日後には99%の家庭から返信が届いていた。

医師による総合評価には同じような症状であっても、当然ながら年齢によって差異が生じている。今回の場合、無料の包茎検査でありさらには手術も無料である。学園側にも当然の思惑がある。それは全国に先駆けて行うことで知名度を挙げ、より優秀な生徒・学生を得ようということ。今回貸しを作ることでいずれ寄付を得ることができる想定されること、更に医学生たちに経験をたませることができるといったメリットがあった。だからどの年齢層にもA評価、すなわち手術推奨をするようにされていた。それでも小学校低学年と高校生では大きな差がある。

おおむね、小学校1年生～4年生までのキッズ、小学校5年生～6年生のヤング、中学生のジュニア、高校生のシニアに分けて基準を設けた。

キッズでは???すべてAの場合に限り、総合評価でA又はBを付していた。また1つでもCがあれば総合評価はDとして手術を推奨しなかった。一学年に50人以上の男子がいる学園であるから、各学年に1人か2人はEがつく生徒もいた。セレブゆえ、幼少期に包皮を切っている家庭や剥かせている家庭もあつたのだ。実際、Aがつく生徒は一学年に1人〜5人程度、BやCが5人〜10人弱、残りはDとなつた。

ヤングではAが3つの場合は総合判定もA、A2個とB1個なら総合判定はB、A2個とC1個またはA1個とB2個またはB3個ならば総合判定はC、それ以外はDというのを原則とした。しかし医師の所見でプラスマイナス1をつけることが許されていた。約50人の男子生徒のうち、Aをつけられたのは小5が約5人、小6が約10人。包皮を反転できない子は小5ともなれば垢がたまつており、包皮も長いケースが多かつたので、意外とAは多かつた。小5はBが約10名、Cが約15名、Dが約20名でEが3名程度だつた。小6はBが約10名、Cが約15名、Dが約10名、Eが5名程度だつた。

ジュニアは約150名の男子が一学年に在籍する。ジュニアでは?を中心と考え、??は参考だつた。?がA、すなわち溝まで剥けなかつた者は無条件でAと判定され手術を強く推奨された。?がBの者、一応剥くことはできるが狭い場合はB以上の判定がつけられてしまう。?がC、容易に剥くことが可能であっても?で包皮が長い場合はB、時にはAがつけられてしまう。中学卒業時に包皮切除を推奨する社会的な流れもあり、中3では多くの生徒がAかBを付されていた。結果的に中1ではAが20%、Bが30%、Cが25%、Dが20%、Eが5%。中2ではAが30%、Bが30%、Cが1

5%、Dが15%、Eが10%。中3ではAが35%、Bが25%、Cが5%、Dが10%、Eが25%といった割合であった。

シニアは本来、来年以降なら全員が包皮切除を施されている年齢である。それゆえ、AまたはBを基本として結果が出された。???で一つでもAかBがあれば、総合判定はAとなった。容易に剥くことが出来て包皮も短く亀頭が覗けており、日ごろより性器を清潔に保つ習慣がある者のみがA評価を逃れることが出来た。総合評価Dとなるのは包皮が半分以上常時剥けている場合のみとされた。その結果大体Aが45%、Bが15%、CとDが5%、Eが30%となっていた。年齢があがるにつれて既に剥けているEが少々増え、AやBが減っていった。

項目評価・総合評価いずれも本人たちには知らされない。医師の所見による結果が突如保護者宛に送信されるのだ。子どもと話し合って決める家、親が一方的に決める家、様々である。もし親が手術希望を出した場合、子どもには拒否することが出来なかった。中には学校で突如手術を告げられるケースさえもある。

私立C大学付属小・中・高等学校（中編）（後書き）

後編では手術を受けることになった男の子たちを描きます。

私立C大学付属小・中・高等学校（後編）（前書き）

結局手術申請をしたのは

小1・・・4人	小2・・・5人	小3・・・8人
小4・・・10人	小5・・・13人	小6・・・22人
中1・・・82人	中2・・・95人	中3・・・99人
高1・・・99人	高2・・・84人	高3・・・68人

約600人も男子生徒が包皮手術を受けることになる

私立C大学付属小・中・高等学校（後編）

学園側が予想したように、多くの家庭から手術申請があった。その理由は以下の2点に尽きる。

？来年以降必修となる予定の割礼と異なり、局所麻酔を使った手術であること

？包帯手当て代など一部を除き、手術費用は学園負担であること

無麻酔で痛い思いをさせるくらいなら今のうちに、というのが親の本音である。それでも小学生では、「まだこれから剥けてくるだろう」という希望的観測や「子どもがかわいそう」といった親心から総合判定がAであつても手術を拒否する家庭が少なくなかつた。そうはいつても小4までのキッズではAと判定された11人中7人が申請した。Bも24人中16人が申請となっている。さすがにCでは10%程度であり、Dと判断された約120人の中に申請者はいなかつた。小学校高学年のヤングでは15人がAと判定され12人が申請、Bは20人中15人と高い確率だった。Dはこちらも皆無であつたが、Cでは20%以上が申請している点がキッズとは異なる。中学生のジュニアではAと判断された123人のうち118人までが申請した。中1の3人、中2の2人は来年までに解決するという僅かな望みにかけたのだろう。Bも125人中115人が申請している。Cでも60%を越え、僅かではあるがDの中にも申請者がいた。高校生のシニアは総合でAと判断された189人中185人が、Bと判断された57人中52人が、Cと判断された12人中10人が、Dと判断された24人中4人が申請を出した。AやBでも拒否者がいるのは、「来年以降必修化されても自分たちには関係ない」という思いがあると考えられた。

通常業務と並行しての手術であるから、一日に受けられる数は大学病院とて限界がある。小学生全員を初日に行い、あとは中1から高3という順番で一学年ずつ一日をあて、合計7日間行われた。相当人数をこなすわけであるから手際よいかねばならない。これも病院としては格好の臨床実習となるのだ。学年担当がつれてくるのは大学病院の手術待合室までだ。電話やり取りをしながら学年毎、クラス毎につれられてくる。ここからは見習いを含む若い医師や看護師が全てを取り仕切る。

各手術ベッドの周囲には熟練の医師が1人、実習医師が2人、熟練看護師が1人、実習看護師が2人というのが基本構成である。こうすることで技術を学ばせるのである。難しい例では熟練医師が執刀するが比較的やりやすい症例では大学卒業前の実習生が担当することもある。もちろんそのようなことは、家族や本人に知らされていない。もっとも小学生の中にはこれから何が起こるのかわかっていない者も少なくない。中学生でも自分の知らないところで親が勝手に申請していて知らされていないということもある。自分の意思で受けることにした者、親に強要された者、同じ施術といっても状況は様々だ。

手術室に入るとまずズボンとパンツと靴下を脱がせ、ビニール袋に入れさせる。時間短縮から手術着は使用しない。台に上ると看護師がシャツを出来るだけ上にまくりあげ、両手の手首をしっかりと握って胸にのせ、上半身を固定する。暴れると怪我の原因になるので非常に重要な役割である。両足は手術台にくくりつけ、動かさないよう固定する。基本的に除毛はしないが、中高生の中で相当量が生えている者はかみそりで簡単にそり落とす。ここまでは看護師の役

目である。熟練と若手が役割分担をしながら手際よく進めていく。手際が悪い実習生などに対して熟練看護師から指導が行われる。そしていよいよ手術がはじまる。

手術台にのぼった時点で泣き出したりベソをかく者も少なくない。小学生などではいたし方ないことである。中には待合室やズボンで脱ぐだけで泣く小学生もいる。中高生ともなれば不安げな表情であってもさすがに泣き出すものは殆どいない。近くに同級生がいるということ弱みを見せられないというのも手伝っている。しかしさすがに麻酔の注射をペニスに打ち込まれる時は泣き叫ぶ者も出てくる。細い針ではあるが、非常に敏感なところに打つのでから痛くないわけではない。数分後、麻酔が効いたことを確認して包皮にメスが入る。このときは痛くないはずであるが、ベッドの上で涙を浮かべている生徒は比較的多い。余分な包皮を切り落とし、最後に包帯がまかれる。そして手当での仕方を説明してある紙をもらい、手術室を後にする。本当は患部によくないのであるが、待合室でパンツやズボンもはくことが求められた。

手術の日、学校のクラスでは手術適用者以外のために授業が行われているが、あくまで補習的な内容である。この1週間ほどは手術のために空けられているのである。だから手術を終えた生徒は帰宅してもよいことになっていた。保護者の手術室立ち入りや手術前面会は認められなかったが、病院内に保護者が待機する控室を用意してあった。手術終了予定時刻の前になるとそれぞれの学年の保護者たちが多く車で乗り付けていた。麻酔が切れば当然痛みが発生するので車で迎えにくる家庭が非常に多かった。迎えにこれない家庭の子のために、痛みが一段落するまで休憩できる部屋をも用意している高待遇だ。

もっとも本人たちは手術終了時点ではこの後の痛みをそこまで想定できていない。一定時間が経過した後、手術中とは比べ物にならない痛みが襲ってくるのである。そして家庭で包帯を取り替えたり消毒をする時、激痛が走る。彼らの試練はここから本場なのである。

私立C大学付属小・中・高等学校（後編）（後書き）

最終話、いかがでしたでしょうか。同じ手術を受けるならこのような高待遇の元、受けたいものですね。私自身の手術体験（小3）を思い起こしながら情景を描いてみました。制服姿の小中高生徒たちが並んで手術を受ける光景、現実にあるならば見たいような気がします。また機会あれば違う話も書いていきますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1842n/>

現代の通過儀礼～男児割礼

2010年10月10日13時53分発行